

ふ。

森林保護の充分な木曾川の上流に、洪水のあつた話をきかない。

森を伐り倒して、雑木林にする、雑木を伐り倒して、地表を裸かにして、桑を植ゑ、桃を植ゑる、これがため一地方で一萬圓の収益があらうが、他地方では時ならぬ洪水の害を蒙つて、十萬圓の損をする。自然に逆ふといふことは、國家經濟の基礎を危ふするものだ。

○

日本人は、淡白を好むといふのは虚で、淡白は江戸趣味に過ぎない、京阪は舞妓の姿を見ても、濃厚だと、誰れやらが言はれた。

例に出すのは恐れ多いが、伊勢太神宮は白木造である。雪舟の描いた墨繪は京阪でも價値に變りは無い。趣味の低い遊治郎を相手の賤業婦と引合に出して、國民性を推斷されては耐らない。

湖沼研究者の見たる大下先生の水彩畫

子爵 田 中 阿 歌 麻 呂

私が、大下先生を知つたのは、今を去ること三四年前、山岳會の關係であつて、其交際の年月は、誠に短かいのであります。且つ私は美術の事に就ては、門外漢であるから、先生のお作に就ても、批評する資格は無論ない。然し、先生の主なる事業は、水彩畫であつて、而かも靜かなる水を愛せられた。そして最近數年間に於て、遍ねく本邦山間の湖沼に親まれて、其の靜かなる水の姿をキャンバスにとゞめられたやうである。斯く先生は、藝術の方面からして、湖沼を觀察せられた人であるが、私は又、地理學上或は湖沼學上より十數年來、本邦の湖

沼を研究して居るものであります。其着眼點は、各々異にするかも知れぬが、先生の作を、私ども美術の門外漢の眼より見ても、其觀察が眞に迫つてゐて、素人の眼で見ても、到底分らぬ點にまで、細かく行届いて居るのであります。實に吾々湖沼研究者の、好標本としても、差聞えないのであります。——此程、文部省開催の美術展覽會へ行きました。其の水彩畫陳列室の一隅に先生の遺作の「柳」と題したのがありました。靜かなる水を湛えた沼のほとりに、茂つた柳を描いたものであつて、如何にも其時節の、沼の水色や、氣分情調がよく現はれて居ります。これを専門の人の眼から見たならば、又それ〴〵、批評もありませうが、湖畔の狀況といひ、殊に水際の植物の生態から申しても、吾々科學上からして、湖沼を研究して居る者の眼より見ても、毫も間然するところがないのであります。

且つ私は、この畫に對して先生、生前の面影を思ひ浮べずには居られなかつたのであります。今も申した通り、先生に往復をしたのは、極めて短かい間のことであり、先生の性行等に就ては、詳しく知ることありませんが、いつも先生から受けた印象は、寡言沈黙で、それで居て、どこか深い情熱を湛えて居られるやうなところがありました。それがよく先生のお作にも、現はれて居るやうである。そして極めて謙遜で、少しも自己を吹聴されるやうなところが、ありませんでした。先生が多年洋行せられて居る事も、私は先日初めて、新聞で知つたやうな次第です。

又、先生は極めて筆の早い方かたであつたらしい。私が或時、諏訪湖の御渡おみわたしの畫を依頼すると、如何にも、無雜作に請合つて行かれたやうであつたが、其明くる朝、まだ繪の具の滴るやうなのを届けられたには、驚きました。而かも一點の非難すべき箇所もないのです。御渡の印せられた水の湖に、夕日の赤く反映して居る具合が、如何にも妙を極めてゐる。この繪は、私が數年間諏訪湖に就て、研究した結果を纏めて、此頃一冊にして公にしようとするものゝ中に、挿入する積りのものであります。

其繪は、漸く此頃印刷が出来て參りましたが、これに對して誠に感慨の深いものがあります。而も印刷の際

には、先生の嚴密なる校訂を願う筈になつてゐたのであるが、何分急に逝かれたので惘然として居るやうな始末です。私は我が國の湖沼學上から、此の美術家を失なつたことを、くれぐれも、歎ずる次第であります。

水彩畫の教育家

中 村 不 折

大下君は、畫も旨かつたけれども、夫よりか、繪の教育に大變骨を折られて、そして其方で現はれて居ることは、誰でも知つて居ること、今更我々め喋々を要さぬ、然し世には其教育と云ふことを利用して、自分の野心を充たすことに汲々として居る人も澤山にある、そして彼方此方、地方へ出て講習などやつて居ると、自分の家の金庫を充たすと云ふことが、目的であつて、美術の普及とか、斯道の爲とか云ふ様な人が少ない、大下君は性質が淡泊で、度量が廣く、夫で人と争ふたと云ふことがない、誰に對しても春風の吹いて居る様な、温乎として、玉の如しとでも形容すべき風采であつた、美術、取り分け水彩畫の教育には非常に趣味を持つて居つた、殆ど先天的とでも云ふ有様であつて、日本國中を駆け廻つて歩いて、有志の青年を集めて、講習をしたり、雑誌を發行して、夫れ等の人々の便宜を謀つたり、研究所を建て、子弟の養成に盡力したのである。到頭そゝ云ふことに盡力して居る内に、病を得て、倒れて仕舞つた、これは云はゞ軍人が戰死したと同じ事である、夫で平素大下君が、そゝ云ふことに奔走せられて居ることは、我々の様な、不精な、自分の好きな畫計りかいて居つて、子弟の教育なんかを、度外視して居る身では、常々大下君の行動を見て、愧ぢて居たのである、其最後を見て、一層尊敬の念を増したのである。

雑誌「みづゑ」も、本號を以て終りとするそゝであるが、僕は誰か後繼者を得て、永續させたい希望である、然し目下の事情、夫が出來ずとすれば、一時休刊して、外に丸山君が歸られた上か、又は誰か特志の人が出て、其跡